

特集

# 社会と

つながる

# 演奏会活動

さまざまな展開をみせる音楽学部の社会連携。

多彩なパートナーが演奏活動とおして藝大に期待するもの

藝大が新たに獲得するものに光をあてる。



# 藝大のブランド力 藝大のアピール力

## 代表的な四つの演奏会活動

**司会** 今回の『藝大通信』では、音楽学部が地域、企業、各種団体等と進めている演奏会活動を集めました。代表的な四つの活動、「藝大メサイア」「伊澤修二先生記念音楽祭」「台東第九公演」「日本国際賞」について、それぞれに関係の深い先生方から内容を紹介したいと思います。

**多田羅** 「藝大メサイア」は朝日新聞社の主催で、戦災孤児を含む恵まれない人たちに對する、社会的なチャリティーが求められていた時代を背景に始まりました。

一九五一（昭和二十六）年に行われた第一回は、音楽学部の学生と教官二三〇名全員が無償で出演し、三〇名のオーケストラと全学生による合唱、声楽教官のソロによる演奏だったそうです。当時の演奏スタイルは、現在のロックの演奏の主流である

軽快さというよりは重々しい音楽であっただろうと想像できます。それは私が学生のとき、第一回で指揮をなさった金子登先生指揮の非常に遅いテンポで重厚な音楽づくりの「メサイア」を経験しているからです。当時、演奏会の収益金は文房具や玩具に於いて、「メサイア号」という車で施設の子どもたちのところに配って歩いたそうです。またそのときに上野動物園のサルやシカといった動物たちも一緒にまわったと記録に残っています。

二〇〇〇（平成十二）年に五十回、昨年末に五十八回目を迎えました。五十周年を迎えた当時の新聞には、これから先も五十年経って「二世紀を迎える」と発表されているのですが、この責務を積極的に捉え、藝大が社会に対して何をなし得るかというケースとして大きく評価できるものになるであろうと思われれます。

**佐野** 「伊澤修二先生記念音楽祭」は一九



守山光三（もりやま・こうぞう）  
教授 — 音楽学部器楽科（ホルン）

1944年生まれ。

1967年東京藝術大学音楽学部器楽科ホルン専攻卒業。

1967年 旧西ドイツ・ベルリン音楽大学入学。1972年同大学卒業。

1968年以降、東京交響楽団、ベルリン交響楽団、ベルリン・ドイツオペラ管弦楽団、

ライン・ドイツオペラ、ドゥイスブルク交響楽団、

新日本フィルハーモニー交響楽団で演奏活動を行う。

1973年～78年ドゥイスブルク市立ニーターライン音楽学校講師。

1979年東京藝術大学音楽学部器楽科非常勤講師。87年同助教授。

1999年～東京藝術大学音楽学部器楽科教授。

守山光三

音楽学部器楽科教授

多田羅迪夫

音楽学部声楽科教授

佐野靖

音楽学部音楽教育教授

松下功

演奏芸術センター教授

八七（昭和六十二）年十一月に、東京藝術大学音楽学部の前身である東京音楽学校の初代校長を務めた伊澤修二の出身地、長野

県高遠町（現・伊那市高遠町）と連携して始めた音楽祭です。

第一回は、当時の服部幸三音楽学部長が



多田羅迪夫 (たたら・みちお)  
教授 — 音楽学部声楽科

1947年生まれ。  
1969年東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。  
71年東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程（オペラ専攻）修了。  
1973～75年イタリア留学。75～77年ハイデルベルク市立歌劇場専属歌手。  
77～81年ゲルゼンキルヒェン市立歌劇場専属歌手。  
1982年東京音楽大学非常勤講師。  
1982年東京藝術大学オペラ研究部（オペラ科）非常勤講師。  
1986年東京藝術大学音楽学部声楽科非常勤講師。90年助教授。  
2000年～東京藝術大学音楽学部声楽科教授。

記念講演をして、藝大オーケストラが演奏するという形でした。第二回は博士課程在籍のソリストが演奏を行っています。第三回からは私がかかわっているのですが、高遠町にある二つの小学校（高遠小と高遠北小）の児童による演奏や音楽劇の発表と、藝大音楽学部四年生のオーケストラ演奏という大きな枠組みができ上がり、以降この形がずっと続いてきています。

第五回からは、高遠町の中学校が参加するようにになります。これは第一回のように参加した当時小学校五年生だった子どもたちが中学校三年生になり、藝大オーケストラと合唱したいという旨を藝大側に伝えてきたことから始まったんです。以後毎年参加することになるので、これは画期的なことだったかもしれません。そのときにも偶然ですが「メサイア」の（ハレルヤ）を歌っています。

その後、高遠高等学校の生徒たちや地域の合唱団も加わり、オーケストラと共演するようになりました。このように地域の行政と学校、そして大学が連携して、二十年以上も音楽祭が続いているところは、日本中探してもほかにはないのではないのでしょうか。

ここ数年は音楽学部の学生オーケストラに対して各方面から声がかかることが多くなってきましたが、二十三年前には大学が地域に出かけていくというとはかなり珍しい時代でした。そのあたりの時代背景も変わってきていますが、この伝統は大切にしていきたいと思っています。

守山 「台東第九公演」は二十八年前、一

九八一（昭和五十六）年にスタートし、来年度で三十周年を迎えます。

当時の下町地域は人口がどんどん減少し、中学校も統合されるなど元気がなくなっていました。そうした下町に元氣を取り戻そうと、当時の内山榮一（台東区長）が「浅草サンバカーニバル」とともに考案したのがこの「台東第九公演」でした。当時の教育長が台東区合唱連盟にペーター・ヴェンの「第九」を歌ってみたいかと働きかけて企画が始まり、同区内にある藝大にも協力を要請してきたわけです。当時の藝大にはそういった前例がない時代でしたが、音楽学部長であった声楽科の渡辺高之助先生が賛同し、そこから話が進み実現したそうです。

最初は合唱に集まった人数が一七〇名ぐらいでレベルもそれほど高くなかったようです。三回目ぐらいから二百数十名が集まるようになり合唱団として形になってきて、以後その規模をキープしています。

下町に「第九」が定着したのは意外かもしれませんが、昔から上野、浅草の人たちはクラシックが好きだったというのです。合唱に集まってくるメンバーの中心が、伝統的な職人さんや下町の商人の方々だというのは興味深いことだと思います。

松下 「日本国際賞」は、これまでの三つの演奏会とは性格が異なり、「受託事業」という形で行っています。

「日本国際賞」は今年で二十五回目を迎えますが、藝大で演奏を受託するようになったのは四年前からです。この賞は財団法人国際科学技術財団の主催で、世界中の科学者を対象に、人類の平和と繁栄に著しく貢献した人物に賞を授けようという趣旨で設

立された、ノーベル賞クラスの価値ある賞なんです。

授賞式は国立劇場で行われ、天皇・皇后両陛下のご臨席を仰ぐという大変大きな式典なので、これまではプロのオーケストラが演奏を務めていました。ところが受賞者が入場してくるたびに科学系・物理系の大学院生が先導するものですから、演奏も若い人たちにお願ひしたいと、藝大に声がかかったのです。

授賞式では、受賞者が希望する曲を三十分以内にまとめて演奏するというのが大きな務めとなっていますが、開場時の演奏も行っており、これまでは受賞者が入場するときにロビーで弦楽四重奏を演奏していました。しかし、舞台が国立劇場なので「和」の音も欲しいという要望が出たことから、邦楽科を有する藝大ならではの邦楽演奏を受賞者が入場する前に花道で行うようになりました。こちらもご臨席の各国大使の方々には「和」の音色を聴いていただくと、非常に評判がいいようです。

### 連携のあり方と課題

多田羅 「藝大メサイア」が始まった当時の世相と比べると、五十八年が経過した社会状況が大きく変化していますから、主催者である新聞社の立場と、私たち藝大の立場とが随分違ってきているのではないかと思います。「藝大メサイア」は毎年十二月中旬に行われる恒例化した慈善事業として定着してきましたし、藝大もそれに協力してきましたわけですが、藝大ではその時期にはまだ授業が行われているのです。慈善事業と

いう社会に貢献する活動に参加するのであっても、声楽科の学生にとって授業との両立が困難になってきているのも事実です。

ただこの件に関しては、公演の開催時期を授業の終わっている時期にずらしていただくよう新聞社にお願いするなどして、徐々に解決の方向には向かっています。

**佐野** 「藝大メサイア」は企業が主催であっても、非常に公共的な意味があったわけですよ。さらに藝大声楽科の学生たちにとっても「メサイア」のソリストになるという大きな目標があつて、学内の盛り上がりや社会の期待がうまくつながった結果だと思つたのです。

「伊澤修二先生記念音楽祭」の場合は、近代日本の音楽教育の祖である伊澤修二の出身地であるという郷土の誇りを大切にしたいと思つていた高遠町と、音楽学部創設者の生誕地を訪れることに教育的な意味があると考へていた藝大との思惑が合致し、創立百周年を機に連携が開始されたのです。高遠町の行政や藝大指揮科の尽力もあつてうまく運営されてきたし、今では四年生オケの卒業旅行的な位置づけともなつていますが、「藝大メサイア」のように、学内からソリストを選び派遣するなどの、いい意味で学生相互が切磋琢磨する盛り上がりがある。もう少しあつてもよいのではないかと思つています。少なくともオーケストラに関する学生しかこの音楽祭に参加しない、他専攻の学生はほとんど知らないという認知度については、参加の仕方や広報を工夫し、もう少し学内に拡げていくことで、音楽学部全体としての連携にしていかななくてはならないと思つています。

**松下** 国立大学法人化以前は「受託事業」

は難しかったのですが、法人化されてからは収入が得られるような仕事もできるようになりまし。しかし、演奏によって収入が得られるからといって、何にでも乗り出していいというわけではないですし、その基準が難しいと思つてます。「受託事業」は、これから藝大というブランドの売り出し方を考えるうえで、表へ出ていくためのよいステップではあるのですが、そのぶん慎重に進めていかななくてはならない分野です。

その一方で、いつも同じことをやっていれば仕事に来るわけではないですから、時代のニーズに合った新しいアイデアを持つていなければいけませんし、基本は大事にしつつも周りの状況をよく見て事業を展開していく必要があると思つています。

**多田** 学外から藝大の学生に対して演奏を依頼してくる事例が最近特に増えています。藝大が持つている演奏というコンテンツを社会に提供し、それに対する謝金をいただくわけですが、現実的には演奏に対するコストを引き下げることに貢献してしまふという側面もあるので、その関係をうまく整えないといけません。つまり、一般の演奏家に頼むよりも、藝大の学生に頼んだほうがクオリティが高いうえに廉価であるというように、社会的に利用されてしまふことが危険なのです。教員や学生の演奏活動と社会貢献のバランスをうまくとりながら進めて行かなければならないと思つています。もう一つの問題として、政府は国立大学法人に対して民間資金導入を推進するよう指導していますが、そのわりには体制その



佐野 靖 (さの・やすし)

教授 — 音楽学部音楽教育

1957年生まれ。

1981年東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。

85年東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程（音楽教育）修了。

1986年同博士課程中途退学。

1986年東京学芸大学助手。

1988年東京藝術大学音楽学部講師。1990年 同助教授。

2006年東京藝術大学音楽学部教授。

ものが整っていません。我々がオペラ公演を行う場合、予算が非常に削減されるなか、各方面において教員が寄附を集めているのですが、そうした行為が民間資金を導入することであるとすれば、筋が少し違ふと思つています。

**守山** 寄附について触れておきますと、日本の政府にそういった認識が希薄なんだと思つています。要するに企業の寄附に対する税制優遇策を欧米並みにする必要がありま

す。日本と比較して、欧米のほとんどの国では、歴史的背景もあるかもしれませんが、税制上の寄附金に対する税控除の範囲が広く、また控除限度額が高く設定されている

んです。アメリカなどでは、そうした優遇策を利

用して私立大学はお金を集めています。ですから優秀な学生は公立よりも私立大学に集まるわけです。ところが日本の場合、そうしたシステムをつくらないまま国立大学を法人化してしまつたんです。教育研究の成果を外へ持つていって見せるにもお金が必要なのです。ですから、官が主体となつて寄附を集めることができるシステムをつくり、それが文化に配分されるというのが理想だと思つています。

### さまざまな展開

**松下** 最近の藝大の学外における演奏活動として、春と秋の褒章伝達式等で藝大フェルハーモニアと邦楽科が演奏を行つていま



松下 功 (まつした・いさお)

教授 — 演奏芸術センター

1951年生まれ。

1977年東京藝術大学音楽学部作曲科卒業。

1979年東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程(作曲専攻)修了。

1979~84年ベルリン芸術大学留学。

1988年東京藝術大学音楽学部作曲科非常勤講師。

1998年長野オリンピック公式文化プログラム・オペラ「信濃の国・善光寺物語」作曲及び開閉会式入場行進曲の作曲。

2000年ベルリン・フィル・サマーコンサートで和太鼓協奏曲「飛天遊」が好評を博す。

2003年東京藝術大学演奏芸術センター助教授。

2006年東京藝術大学演奏芸術センター教授。

す。これは文部科学省からの受託事業となつています。内閣府の「みどりの式典」でも藝大フィルハーモニアが演奏しています。演奏はどちらも弦楽四重奏など小規模の編成ですが、音楽の重要性を認識していただいているのではないかと思います。

**守山** 八月十五日に日本武道館で行われる「全国戦没者追悼式」も藝大フィルハーモニアが演奏を担当しています。これは昭和三十年代から続いています。また日本たばこ産業が主催する「期待の音大生によるアフタヌーンコンサート」にも藝大生が定期的に出演しています。ほかに、取手市とは十五年以上続いているのですが、毎年五校ほどの小中学校に学生を派遣して管打楽器の指導を実施しています。同様の指導を穂

高町や妙高市でも行っていますが、やはり年の近い学生に教わるほうが緊張しないですね。

藝大音楽学部の一つの利点は、やはり藝大フィルハーモニアというプロのオーケストラを持っていることなんです。多田羅先生担当の芸術活動推進委員会には外部からの演奏依頼がたくさん来ますが、これは学生ができる演奏会かどうかと、仕分けをしていくわけですね。そこで授業との絡みや、演奏会の性質などを考慮して、学生には向かないような場合はプロである藝大フィルハーモニアを派遣するわけです。そういう意味で、藝大が請け負う演奏会でも、いろいろなバリエーションが可能になっていきます。

**松下** 受託事業では、ほかに「LEXUS Concert」というものがあります。これはトヨタの高級ブランド、レクサスを購入した顧客の方たちのために行うコンサートで、これまでに三回実施されています。

当初は自動車のディーラー企業から、店舗で演奏会をして欲しいという話だったので、学生に一企業の宣伝をさせることはできないと対応しました。ところが、そういった趣旨ではないという話だったので、各店舗で実際に行われている演奏を聴きに行つたうえで、お受けすることにしました。

お受けするからには、演奏会は店舗ではなく音響効果のしっかりしたコンサートホールで行いたいと奏楽堂で行うこととしました。当初、チラシのデザインに自動車をお載せしたところ、「車はやめてください。車を売るためにやるんじゃないんです」と言われました。むしろ社会貢献の一環として行いたいということで、実際、藝大にも貢献してくれています。

耳の肥えたお客さまもいるので、毎回プログラムを変えていかなければなりませんし、藝大のよさも順番に出していかなければなりません。ですから、例えば今後は邦楽科による演奏も実施したいと思つておられます。

藝大としてはいい演奏を提供して、その後の演奏会にもお越しいただけるような関係を築いていきたいですね。

## 藝大ブランドの活用と可能性

している時間が命なんです。社会と連携するということは、奏楽堂で行う演奏会とはかく、例えば高遠町で行われる場合、何人もの演奏家がそこまで足を運ばなければならぬわけです。

だからそれだけのインパクトがあるわけですが、常に移動という問題がつきまといます。美術の場合はコンテンツが動かせるわけですから連携しやすいと思うのですが、音楽の場合は、その点が難しいのです。

**守山** いろいろな連携の形があると思いますが、「東京藝術大学」に依頼するという意味なんです。外部から見ると、藝大は芸術の固まりなんです。藝大に触れることによって芸術的な雰囲気味わうことができると信じて、藝大に依頼してくるわけですね。ですから我々としては、それを裏切つてはいけな思っています。

社会連携に卒業生を使うという手段もありますが、社会が何を求めているかと考えると、現役の学生、今藝大にいる人たちと同じ時間、同じ空間を共有したいというのがあるのではないしょうか。

**多田羅** 社会連携で藝大がなし得ることというのは、やはりブランド力とそのクオリティの高さ、この二つが社会に対して発信し得る一番大きな強みだと思つてます。藝大音楽学部は演奏家の集団ですから、そのすばらしさを社会に発信しつつ、学生の教育との両立という問題とうまく整合性をつけられるかが今後のポイントになるのではないかと気がします。こういった点をクリアするようなシステムづくりをもつと

**佐野** 音楽の難しいところは、演奏が常にライブであるということです。つまり演奏

もつと我々はしていかななくてはならないですね。

## 藝大メサイア

多田羅迪夫



上：第58回「藝大メサイア」2008年12月18日（木）。東京文化会館 大ホール。

右：4人のソリスト。左から伊藤達人（テノール）、宮内朋子（アルト）、小林沙羅（ソプラノ）、加未徹（バス）。

「藝大メサイア」（朝日新聞社主催）は、東京藝術大学の教員・学生が無償で出演し、毎年十二月に開催されているチャリティー・コンサートである。その第一回は一九五一（昭和二十六）年十二月十八日、当時唯一のクラシック音楽演奏会場であった日比谷公会堂で演奏された。日本の戦後復興がまだ十分ではなかった時代、戦災孤児を含む恵まれない方たちにチャリティーを行い、藝大がメサイアを演奏することで救世主を迎えて社会を明るくしたいという想いがそこにはあった。演奏は音楽学部教官と学生二〇三名全員が無償出演して行われ、収益は全て社会福祉のために使われた。

歳末恒例の行事として親しまれた本公演の半世紀以上にわたる長い歴史のなかで、その演奏スタイルは徐々に変化してきている。それは即ち、日本音楽界のバロック音楽の演奏スタイルの変遷の歴史そのものであったともいえるだろう。当時、欧米のバロック音楽の演奏は、後期ロマン派的演奏スタイルが主流だった。新即物主義的演奏法の台頭の後、スイス、オランダ、イギリスを中心とするバロック音楽を研究・実践するグループが、ピリオド楽器（いわゆる古楽器）とその奏法について新たな研究成果を世に発表するなかで、音楽界においても大きな支持を受けるようになり、欧米の音楽大学に次々と古楽科が新設され、藝大音楽学部にも古楽専攻が設置された。その潮流がモダン楽器によるバロック音楽の演奏にも影響を与えたのは当然の成り行きである。モダン楽器を使用する藝大管弦楽研究部を擁する「藝大メサイア」も例外ではない。そして楽器だけでなく、声楽科学生による合唱団や独唱者たちの歌唱法も、ベルカント唱法と並行してピリオド奏法的歌唱法を徐々に身につけ始めた。そのことは大学院生向けの声楽特殊研究授業「宗教音楽」を担当している筆者が実感している。

ごく初期の「藝大メサイア」でこそ独唱者を教官が務めたが、ある時期から学部声楽科学生の四年生からオーディションで選ぶ慣わしとなった。学生にとって独唱者に選ばれることは、卒業後の演奏家としてのプロフィールにそれを記載するほど非常に名誉なことで、過去の独唱者リストには多くの著名な声楽家が名を連ねている。第五十回を期に、学部生だけでなく大学院生にもオーディションの参加資格が与えられるようになり、それ以降大学院生が選ばれるケースが増えた。しかし、学部生が先輩を押しつけて選ばれるケースもあり、まさに実力次第でソリストに選ばれる競争原理による選抜方法は、独唱者の水準を高める好ましい結果を呼んでいる。また新設されてまもない古楽専攻在籍のカウンター・テナーが「藝大メサイア」アルト独唱者として登場したのもこの第五十回の時であった。

これからの藝大メサイアがどのように変貌を遂げていくのか見守りたいのと同時に、ますますその演奏を進化させ、世界に向けて発信していくことを期待したいと思う。

# 伊澤修二先生 記念音楽祭

佐野 靖

「伊澤修二先生記念音楽祭」は、一九八七（昭和六十二）年、東京藝術大学創立百周年を機に始められた記念音楽祭。以来、藝大音楽学部にとっては、いわば秋の恒例行事の一つとして定着し、二〇〇八（平成二十）年度で第二十二回を数える。この音楽祭は、東京藝術大学音楽学部の前身である東京音楽学校の初代校長を務めた伊澤修二が長野県旧高遠町（現・伊那市高遠町）出身ということにちなみ、毎秋、高遠町文化体育館及び伊那文化会館（第二十一回より）で開催されている。

音楽祭の内容構成は、高遠小学校・高遠北小学校が発表する第一部と、藝大四年生を中心とする学生オーケストラが演奏する第二部という大枠が、今日まで引き継がれている。そこに、地域の中学生や高校生、あるいは音楽祭のために結成された合唱団なども共演するなど、地域と学校、そして

大学が協働する音楽祭として発展してきた。また、音楽祭に参加した管楽器専攻の学生たちが、市内の中学校等で楽器指導も行うようになり、三者の結び付きは一層強くなっている。

このように地域・学校・大学が緊密に連携・協力した音楽祭は、全国的にも類を見ないものであり、地域活性化や文化の創造・発信という点でも、この音楽祭の持つ意義は計り知れない。こうした大イベントを二十年以上にわたって継続できているのは、旧高遠町及び伊那市の郷土への愛と誇り、音楽文化への深い理解があるからにほかならない。また、藝大側にとっても、音楽学部の創設者生誕の地を毎秋訪れ、四年生オーケストラが演奏を行うことは、自分たちの歴史を振り返るとともに、今を見つめ直し未来を展望するために、芸術的・教育的に大きな意味をもつものとなっている。



上：第22回「伊澤修二先生記念音楽祭」2008年10月25日（土）。  
長野県伊那文化会館 大ホール。指揮は道端大輝（指揮科4年生）。  
右：藝大生による伊那市内の中学校吹奏楽部生徒への演奏指導。



# 台東第九公演

守山光三



上：第28回「台東第九公演」2008年12月14日（日）。東京藝術大学音楽堂。

右：指揮ダグラス・ポストック。独唱は左から岩下晶子（ソプラノ）、谷地畝晶子（アルト）、山本耕平（テノール）、新見準平（バス）。



「台東第九公演」は、台東区民で構成する合唱団に、藝大の教員や学生が、指揮、オーケストラ、ソリストとして協力し、一九八一（昭和五十六）年の初演以来、回を重ね二十八回の公演を数えている。

初演の時に台東区長であった内山榮一氏は、四期十六年にわたり区長を務められた方である。自らが祭好きということもあって「下町をなんとか元気にさせよう」と街の活性化に取り組まれ、区民が毎年「第九」を歌うことを提唱した。教育長とおして台東区合唱連盟に合唱への参加を呼びかけるとともに、藝大に対しての出演協力要請を行うことから始めたが、公演の実現までには、準備期間を要することとなった。

藝大では現在、各地域と連携し数々の事業を行っているが、当時は地域貢献についてあまり積極的ではなかったため、出演協力の打診に対しての門は固かった。しかし、徐々に本学側の意識が地域貢献を重視する方向に変わってきたこと、区長及び教育長の想いが届き、一気に実現する運びとなった。時を同じくして、今では日本列島の隅々にまで知れわたっている「浅草サンバ」も内山区長の提唱で実現する運びとなっていたため、下町を活性化させるための

一大イベントである「夏のサンバ」、「冬の第九」が同時期にスタートすることになったのである。

第一回の公演は、区民で構成する「台東第九を歌う会」による合唱に、指揮者として大町陽一郎先生、オーケストラ演奏に管弦楽研究部、ソリストは大学院生が協力して、区内の浅草公会堂で行われた。第一回公演時に一七〇人程であった合唱参加者は、第三回以降になると二百数十人の募集定員を上回る数となり、やむなく抽選で参加者を決める状況となっている。そして、熱心に合唱練習を積み重ねた区民が参加する公演は、発売直後には入場券が完売し、毎回大好評のもと行われている。

また、公演のポスター制作には、かつて本学の教員をされていた福田繁雄先生が二十数年にわたって協力されており、二十五回目の公演となった二〇〇五（平成十七）年には、歴代の台東第九ポスター等を展示した展覧会が台東区によって開催された。

二〇〇二（平成十四）年以降、浅草公会堂から藝大音楽堂に場所を移して行っているこの公演が、台東区の芸術・文化の発展や活性化に、今後も貢献することを期待したい。



# 日本国際賞

松下功

「日本国際賞」は、財団法人・国際科学技術財団が主催し、世界の科学技術の進歩に大きく寄与し、人類の平和と反映に著しく貢献した人たちの顕彰を行うもの。授賞対象分野は、「基礎研究が発信する革新的なデ

バイス」と、「共生の科学と技術」の二分野で、世界の科学関係者たちの推薦を受けた数百件のなかから、二〜三名が選考されて賞が贈られている。これまでの二十四回の授賞式は、天皇后両陛下、三権の長を始めとする関係諸氏をお迎えして、毎年四月下旬に三宅坂の国立劇場において開催されてきた。

第一回の授賞式から、毎回プロのオーケストラが式典の音楽演奏を担当していたが、未来を担う若い人たちにもこの式典に参加してほしいとの意向で、二〇〇六（平成十八）年開催の第二十二回より藝大音楽学部学生オーケストラが参加している。式典では、授賞式での序曲「日本」、入退場、表彰の音楽を演奏し、後半は両陛下のご臨席

を仰ぎ、三十分の記念演奏を行っている。記念演奏会の曲目は、受賞者の希望曲より選曲されている。

初めて参加した授賞式では、小林研一郎教授（当時）が指揮を行った。その記念演奏会ではベートーヴェン、モーツァルト、ベルリオーズの作品を演奏し、皇后陛下よりお褒めの言葉を賜った。第二十三回は招聘教授のダグラス・ボストック氏、第二十四回は矢崎彦太郎氏に指揮をいただいた。いずれの回も、学生たちのステージ・マナーのよさと熱気ある演奏に、高い評価を得ている。

また、音楽学部邦楽科による開式前の演奏は、東京藝術大学ならではの企画と内容であると、列席者から賞賛された。「日本国際賞」では、授賞式の夜に祝宴が催される。毎回、弦楽担当教員を中心とした弦楽四重奏の演奏を行っているが、第二十四回より箏による「和」の響きを取り入れて、宴に彩りを添えている。



上・左：2008年4月23日（水）、東京半蔵門の国立劇場で開催された第24回「日本国際賞」の授賞式（2点とも写真提供：国際科学技術財団）。